# Facebookを活用し、災害にも強い住みやすい地域をつくる

## 東京都調布市　調布Facebook交流会

**働く世代が地域活動に参加することは、時間的にも精神的にもハードルが高いといわれるなか、東京・調布市を中心に4,500人以上の会員を擁する「調布Facebook交流会」は、40～50代の働く世代が多数を占めるという。東日本大震災がきっかけで発足した調布Facebook交流会。会の目的は、Facebookを活用した災害時の地域支援だが、日頃はお店紹介や電車の遅延など役立つ情報がリアルタイムで投稿されている。自動販売機やAEDを地図上に書き込むマッピングパーティやオフ会など地域をつなぐしかけについて、調布Facebook交流会管理人の柴田哲史さんにうかがった。**

**地域活動参加促進のポイント**

- 防災について考えようなどと限定してしまうと、輪が小さくなる。そのため、何でも発信でき、何でも質問できる場づくりを目指した。
- 会員増加の鍵は、役立つ情報が投稿されていること、そして誰もが気軽に投稿できること。
- 会員が安心して調布Facebook交流会に参加できるよう、コミュニティの信頼性を担保する。
- オフ会やイベントを活用し、顔が見える関係づくりを促進する。
- イベントを開催する際は、楽しく意義のある活動であることを全面に打ち出す。
- 世の中の流れを読み、流行を先取りしたイベントを組むなどの工夫をする。
- 活動を行うだけでなく、活動風景や会員同士の交流の様子をFacebookで発信することで、他の会員たちの参加意欲を喚起する。
- イベントを記録に残すことで会員のモチベーションアップを図る。

### ネットを活用して、災害時に必要なモノを必要な人に届ける

調布Facebook交流会は、その名称からも分かるように東京・調布市を中心としたFacebook上のオンラインコミュニティである。現在の会員数は、なんと4,500人超。Facebookをのぞくと、新しくオープンしたカレー店や閉店する書店などの写真つきコメント、子ども食堂の紹介、イベントの告知、ボランティアの募集、マスクの簡単なつくり方、リアルタイムでの電車の遅延や桜の開花状況など、さまざまな情報が投稿されている。

調布Facebook交流会管理人の柴田哲史さん。2011年3月に発生した東日本大震災の際のボランティアたちとともに、調布Facebook交流会を立ち上げた。

この会が発足したのは2012年。きっかけは、その前年の2011年3月に発生した東日本大震災だ。福島県からの広域避難所となった味の素スタジアムに駆けつけたボランティアたちが、避難所閉所後に「災害に備えてつながろう」と結集したのである。

調布Facebook交流会の管理人を務める柴田哲史さんもそのなかの1人であった。当初は避難所で救援物資の仕分けなどをやっていたが、ボランティアや物資の問い合わせ電話が続々とかかってきてさばき切れないという社会福祉協議会（以下、社協）の職員の話を聞き、ボランティア登録サイトをつくることを提案した。柴田さんの勤務先は、企業向けソ

調布Facebook交流会のトップ画面。リアルタイムでの電車の遅延や桜の開花状況など、暮らしに役立つさまざま情報が投稿されている。調布Facebook交流会をきっかけに、会員たちが協力して独自の活動を始めることも少なくない。

フトウエアを提供するIT企業、サイボウズ株式会社。サイトづくりはお手のものである。ボランティアの登録だけでなく、物資募集もこのサイトでさばくことにした。

「それまではテレビのニュースなどで『こんな物資が足りていません』と報道されると、100個で足りるのに1,000個や1万個と届いてしまうことがありました。そのため、現場の混乱を避けるためにサイトの物資募集は工夫しました」と柴田さん。物資を送ってくれる人には事前に提供できる個数を記入してもらい、必要量に達したら「募集完了。ありがとうございました」と掲載し、募集を打ち切るようにしたのだ。この方法で、必要なモノが必要な量、必要な人に届くようになった。煮炊きに必要な鍋から布団、洗濯機、軽トラックなどの調達もスムーズに行うことができた。「ちょっとした工夫ですが、当時はこれが新しい方法として注目されました」と柴田さんは語る。

ボランティアの仮登録も至ってシンプルだ。ニックネームとメールアドレス、自分が協力できることを書き込み、連絡を待ってもらう。子どものプレイルームの見守りは、検索により子ども好きな高校教師と太鼓チームに依頼したという。

## 初心者大歓迎！ Facebookの使い方もレクチャーし、「場づくり」をすすめる

避難所閉所後、ボランティアの間で災害に備えて情報共有のための会をつくろうという話が持ち上がった。そのとき避難所に2,800人ものボランティアが集まったが、みな初めて会う人ばかりだったため、意志の疎通や特技を活かした人材の配置がうまくいかなかったからだ。「顔が見える関係づくりができていたなら、スタートダッシュはもっと速やかにできたし、それぞれの特技も活動に活かせたはずです」と柴田さん。

情報共有のツールはFacebookということになったが、当時、Facebookはそれほど普及していなかった。そのため、当初は「Facebook初心者もどうぞ」「使い方も教えます」というスタンスで参加者を募った。「防災について考えようなどとテーマを限定してしまうと、せっかくの輪が小さくなってしまいます。だから、何でも発信でき、何でも質問できる「場づくり」を目指しました。お気に入りのレストランや多摩川の風景などを投稿し、Facebookに慣れてもらえればいいと思っていたのです」

当初20人足らずで発足した会の参加者は、月を重ねるごとに50人ペースで増えていった。これはすべて会員が会員を“招待”する形で行われた。

顔が見える関係づくりのためには、オフ会の開催

も重要なポイントだ。「1,000人達成記念オフ会」「2,000人達成記念オフ会」などと銘打って、地域のホールを借りて記念イベントを開催している。常時100人ほどの参加があり、今では調布市長の出席も恒例となり、地域づくりや防災についての談話に続き、乾杯の音頭を取るのが市長の役どころとなっている。必要とあらば、柴田さんが調布Facebook交流会の成り立ちなどについてプレゼンテーションも行っている。

調布市と柴田さんが勤務するサイボウズは防災協定を結んでいる。実際に災害が起きたら、調布市、サイボウズ、調布Facebook交流会、IT人材が所属する市内の団体「Code for Chofu」の4団体が連携をとって支援に当たることになっている。そのなかでも調布Facebook交流会の4,500人は実に頼もしい存在だ。

## その時々のブームを取り入れ、楽しく意義のある活動を展開

調布Facebook交流会のコミュニケーションの要はオフ会だが、もうひとつ、多くの会員が参加したイベントがある。それは、マッピングパーティだ。

第1弾として、2014年5月に市内にある自動販売機の地図をつくった。参加者は、市内を歩きながら自動販売機を探し、その写真を投稿する。街を歩き回ることで、地域を再発見し、さまざまな情報が入手できる。第2弾は、ラグビーの試合やオリンピックなどで日本を訪れる海外の人にも役立つトイレの地図である。どこにどんなタイプのトイレがあるのかも調査した。そして、第3弾では、市内に約300あるというAED（自動体外式除細動器）を網羅する地図を目指した。

「これらは、いわば災害時の予行演習」と柴田さんは言う。マッピングパーティに慣れておけば、災害発生時にも会員たちが周辺の危険な場所や支援物資の配布場所などの写真を投稿してくれ、それらを地図上に落とし込むことでリアルタイムに情報を共有できるというわけだ。

こうしたイベントを開催する際に、柴田さんが心がけていることがある。「それは、イベント自体を楽しいものにすることです。そのため、私たちは防災や災害の話はあまりせず、楽しく意義のある活動であることを全面に打ち出します。また、世の中の流れを読み、マッピングパーティがブームならばそれを取り入れるなど、流行を先取りしたイベントを組むといった工夫をしています」

第1弾の自動販売機マップでは、15人ほどが京王線・国領駅に集まり、駅を中心としたエリアにある自動販売機を約2時間探した。「その際も活動を行うだけでなく、活動風景や活動後にお茶やケーキを囲みながらみんなで交流している様子を調布Facebook交流会に投稿しました。Facebookを見た会員の人たちは『こういう活動なんだ』と分かりますし、意義のある活動ができ、その後に楽しい交流もあると分かれば参加したくなります」

こうした丁寧な予行演習を積み重ねることで、マッピングパーティの情報は調布Facebook交流会に浸透し、第3弾のAEDマップには約150人の会員が集まったという。柴田さんは、「AEDマップは、市の防災訓練に組み入れてもらう形で実施しました。集まった約150人の会員たちが防災訓練に参加している一般の人たちを勧誘し、最終的には約300人

調布Facebook交流会とCode For Chofuが協力してつくった「調布AEDマッピングムービー」の一コマ。市民の人たちのダンスとともに、AEDの設置場所が掲示される。

深大寺のシーンでは、僧侶の方たちがダンスを披露。楽しみながらAEDの設置場所を覚えられる。

が防災訓練を開催していた小学校のグランドからスタートしました」と語る。

イベントを記録に残すことも重要だ。AEDマップの際は、調布Facebook交流会のなかでAEDムービープロジェクトチームをつくり、制作はCode For ChoFuが担当した。地域の商店街にも参加してもらい、映像ではAEDの置いてある場所とともに、その地域も紹介。できあがったムービーは調布Facebook交流会はもちろん、市内の銀行や病院の待合室などで流してもらった。この取り組みはメディアにも取り上げられ、参加した人たちのモチベーションも大いに上がったという。

そして、2019年10月の台風19号発生時には、これまでのノウハウを活かし、自主避難所の開設状況や市内の被災状況などをリアルタイムで発信した。調布市ボランティアセンターとも連携し、さまざまな支援を行った。

## 災害に強い地域は、みんなが暮らしやすい地域

調布Facebook交流会の会員は、働き盛りの40～50代が中心である。男女比は半々で、市内の店の経営者や起業人が多いという。会員を増やすためには、役立つ情報が投稿されていること、そして誰もが気軽に投稿できることと柴田さんは言う。また、企業や商店にとっては、4,500人の会員に向けて自社のPRやスタッフ募集などができるのも大きな魅力といえる。

会員の人たちは独自にさまざまな活動をしており、調布Facebook交流会をきっかけに協力して何かを始めることも少なくない。柴崎駅近くの空き家を活用した地域交流の場「しばさき彩ステーション」ではこの春、新型コロナウィルス感染症防止のため学校が休みになった小中学生を預かることにしたという。「新しい活動が始まるのはうれしいですね。ただし、防災からスタートした会だということは、折りに触れて明言しています。また、会が運営するFacebookですから、信頼や信用、安心感はしっかり担保しなければなりません。それが管理人である私の役割だと思います」と柴田さん。

安心感を担保するために、調布Facebook交流会は長年、限られたメンバーだけの非公開で行っていたが、2019年の台風19号の際には公開に踏み切った。これは、会員以外の人にも災害に関する情報を提供したいという思いからであった。

「特に災害支援の場合は、土地勘があることが大事です。その地域にネットワークを持っていたり、『この分野ならあの人に聞けばいい』などという人脈があれば、解決できることも多くなるはずです。Facebookというツールを活用して地域を知り、遊んだり楽しんだりしていたら、いざというときにも役立った。そういう状態が最高だと思います」

大勢の仲間がFacebookというゆるやかなネットワークでつながり、いざというときは団結して課題解決に当たる。顔の見える仲間がいる楽しく住みよい街をつくること――、それは同時に災害に強い街づくりにもつながっている。

ムービーの中には、AEDの使い方を一つひとつ丁寧に解説するシーンもある。調布市内のAEDの設置場所から使い方まで網羅したムービーは大いに役立ちそうだ。

調布Facebook交流会▼